

から、此の目的の爲に取り得る手段の一つは、秘史の言語の研究であらう、かりに制度の如きに就いて言ふならばその制度の名稱の研究であつて、第一、これより以前に秘史に見ゆる制度の名稱と同一の語が他の民族の間に存在しては居なかつたか、第二、此等秘史に見ゆる名稱が蒙古語として、都合好く釋き得るか、第三、關係諸民族の現代語の中に此等の名稱と同一の語が同一の意味に於て存しないか、若し存すれば語原の研究を試みて、蒙古語の入つたものか、或は固有の語であるかなどのことを研究して見ることであらう、勿論これは一民族の有して居つた文化が、その名稱と共に他の民族に移る場合について考へたことであつて、かゝる例は頗ぶる多く此の地方の文化の傳播に於て認むるものであるが、常に必ずしも然りといふのではない、従つて名稱は傳へなくとも、他の文化を傳へたものも言ふ迄もなく有り得る次第であるが、然も此の場合に於ては根本の文化を知り得ること極めて困難なる今日に於ては、殆んど比較の手段が無いのである。

元朝秘史の開卷第一には蒙古開國の傳説が記されて居る、それに據ると天命を受けて生れた蒼き狼と、その妻なる慘白き牝鹿とが大湖(もしくは海)を渡りて幹難河(オソノ)の源なる不兒罕嶽(ブルカン)に來り、こゝに住みて巴塔赤罕(バタチカン)なるものを生んだが、これが蒙古族の祖先であるといふのである、この狼を祖先とする開國傳説に就いて、直ちに思ひ浮べるのはトルコ族のそれであつて、既に内藤博士は「蒙古開國の傳説」と題して兩者の類似を論じて居られる、博士は周知の事實として筆を省かれたのであらうが、トルコ族の間に於る開國傳説に狼が現はれることは、博士の擧げられたものゝ外に古く既に烏孫種族の間にも存すること、白鳥博士はこれを以て烏孫がトルコ種であるとの一證にせられ